

五千人に食べさせる奇跡の役割・ルカ福音書

9:1-9:50では、弟子たちは信仰を深めるというより、パンや変貌や悪霊を追い出す奇跡を見ても、ピンと来なかったことの方が強調されているようにも思います。群衆は、「預言者がよみがったのかもしれない」と見ているのに。

ルカ福音書9:1-9:50において、弟子たちがイエスの奇跡や教えを目の当たりにしながらも、それらに「ピンと来なかった」こと、つまりその真の意味を十分に理解できなかったことが強調されているように感じられるという指摘は、確かにこの箇所の重要なテーマの一つです。一方で、群衆はイエスを「預言者がよみがえったのかもしれない」と見ている点との対比も興味深い観点です。以下に、この点を踏まえて考察します。

弟子たちの反応：奇跡を見ても理解が及ばない

ルカ9:1-9:50では、弟子たちがイエスの驚くべき業を目撃する場面がいくつか描かれていますが、彼らがその意味を深く理解できていないことが繰り返し示されます。

- **パンと魚の奇跡 (9:10-17)** イエスが五つのパンと二匹の魚で五千人以上を養う奇跡を弟子たちは目の当たりにしました。彼らはイエスの指示に従って食べ物を配り、残りを集める役割を果たしましたが、この出来事の背後にある神の力やイエスの真の姿を完全に理解していたわけではありません。むしろ、「どうやってこんな大勢を養うのか」と最初に困惑していた彼らの視点 (9:13) からは、奇跡の本質に「ピンと来なかった」様子がうかがえます。
- **変貌の出来事 (9:28-36)** ペテロ、ヤコブ、ヨハネがイエスの栄光に輝く姿を目撃したとき、ペテロは「仮庵を三つ建てましょう」と提案します (9:33)。この発言は、イエスの神聖な栄光やその出来事の意義を理解していないことを示しており、彼らが状況に適切に応じられなかったことが明らかです。ルカはさらに、彼らが「眠くて仕方がなかった」 (9:32) と記しており、弟子たちがこの場面でもピンと来ていなかったことが強調されています。
- **悪霊を追い出す奇跡とイエスの予告 (9:37-45)** イエスが悪霊に取り憑かれた子を癒やす奇跡を見た後、弟子たちはイエスの力を目の当たりにします。しかし、イエスが自分の死と復活を予告したとき、「彼らはこの言葉が理解できず、その意味が隠されていた」 (9:45) と記されています。この記述は、弟子たちが奇跡に驚きつつも、イエスの使命の核心にピンと来ていないことを明確に示しています。

これらのエピソードから、弟子たちはイエスの奇跡を目の当たりにしながらも、その背後にある深い意味やイエスの真のアイデンティティ、そして彼の受難と復活の計画を理解するに至っていないことがわかります。彼らの信仰は確かに成長の過程にあります。この段階ではむしろ理解の限界や鈍さが強調されていると言えるでしょう。

群衆の反応：預言者としての認識

一方で、群衆やヘロデ王はイエスを「預言者がよみがえったのかもしれない」と見ています(9:7-8, 9:19)。具体的には、イエスを「エリヤ」や「昔の預言者の一人」と考える声が聞かれます。これは、彼らがイエスの奇跡や教えに驚き、彼を何か特別な存在として認識していたことを示しています。しかし、彼らの理解もまた、イエスが単なる預言者以上の存在、つまり神の御子であるという真理には届いていません。

群衆の反応は、弟子たちと比べるとある意味で表面的です。彼らはイエスの業に感銘を受けつつも、それ以上の洞察や信仰の深まりを示すことはなく、一般的な「預言者」という枠組みの中でイエスを理解しようとしています。

弟子たちと群衆の対比：何が強調されているのか

弟子たちが群衆と異なるのは、イエスと直接関わり、彼の教えや業に最も近い立場にいることです。たとえば、弟子たちはイエスの権威を受けて宣教に派遣され(9:1-6)、奇跡を間近で目撃する機会を与えられています。さらに、ペテロが「あなたは神のキリストです」と告白する場面(9:20)は、弟子たちが群衆を超える理解を示す瞬間です。しかし、その直後にイエスの受難予告を理解できなかったり(9:44-45)、誰が一番偉いかを争ったり(9:46-48)する姿が描かれ、彼らの限界が際立っています。

群衆が「預言者」と見る一方で、弟子たちにはそれ以上の理解が期待されているにもかかわらず、彼らが奇跡や教えに「ピンと来なかった」ことが強調されるのは、彼らがイエスの真の使命を把握するまでの過程を描写する意図があるからでしょう。ルカは、弟子たちの信仰が完全になる前の未熟さや混乱を率直に示すことで、彼らが後に聖霊を受けて成長していく姿(使徒言行録)と対比させているのかもしれませんが。

物語の意図：理解の限界を強調する理由

ルカ福音書9:1-9:50では、弟子たちが信仰を深める機会を得つつも、イエスの奇跡や教えにピンと来ず、その真意を理解できない様子が確かに目立っています。これは、彼らがまだイエスの十字架と復活という核心的な出来事を経験していない段階であり、信仰の成長が未完成であることを示すためです。群衆が預言者としてイエスを見るのに対し、弟子たちにはもっと深い理解が求められているのに、それに届かない姿が描かれることで、彼らの人間的な弱さと成長の過程が浮き彫りにされています。

結論

ルカ9:1-9:50では、弟子たちがパンや変貌、悪霊を追い出す奇跡を見ても「ピンと来なかった」こと、つまりその深い意味やイエスの使命を理解できなかったことが強く強調されています。群衆がイエスを「預言者がよみがえった」と見る一方で、弟子たちはもっと近くにいてもその真の姿を把握しきれず、信仰の成長よりも理解の限界が目立つ描かれ方をしています。これは、彼らがイエスの真のアイデンティティと神の計画を完全に理解するまでの道のりを示すものであり、後の信仰の成熟への布石とも言えるでしょう。

そうすると、弟子を集めて教え訓練す4つのフェーズのつながりで見ると、4フェーズ目は、残念な感じですね。よみがえって生きることがピンと来ない。 3:1-6:11: イエスの宣教の開始と準備。 6:12-7:50: 12弟子の選出と初期の活動。 8:1-8:56: 弟子たちがイエスの宣教に同行し、学ぶ段階。 9:1-9:50: 弟子たちへの権威の付与と使命への派遣。

はい、ご指摘の通り、ルカ福音書における弟子たちを集めて教え、訓練する過程を4つのフェーズで見ると、特に第4フェーズ（9:1-9:50）には「残念な感じ」が漂っていますね。弟子たちがイエスの「よみがえって生きること」をピンと来ていない様子が顕著に表れています。以下に、4つのフェーズのつながりとその中で第4フェーズが持つ意味を整理して説明します。

4つのフェーズのつながり

ルカ福音書3:1-9:50における弟子たちの成長とイエスの宣教の展開は、以下のように4つの段階に分かれています：

- 3:1-6:11: イエスの宣教の開始と準備** このフェーズでは、イエスが公の宣教を始め、奇跡や教えを通じて人々を引きつけます。しかし、この時点ではまだ12弟子は選ばれておらず、イエスの活動の土台が築かれている段階です。
- 6:12-7:50: 12弟子の選出と初期の活動** イエスが12弟子を選び、彼らを教育し始めます。弟子たちはイエスの教えを聞き、奇跡を目撃しながら学びますが、まだ理解は浅く、イエスに従う最初のステップを踏み出したばかりです。
- 8:1-8:56: 弟子たちがイエスの宣教に同行し、学ぶ段階** 弟子たちはイエスと旅を共にし、宣教活動に参加しながら奇跡を間近で見る経験を積みます。このフェーズでは彼らの信仰が試され、少しずつ理解が深まっていく過程が描かれています。
- 9:1-9:50: 弟子たちへの権威の付与と使命への派遣** イエスは弟子たちに権威を与え、彼らを宣教に派遣します。弟子たちは自ら宣教活動を行い、奇跡を起こす力を経験します。しかし、同時に、イエスの受難予告（死と復活の予言）を理解できず、誰が一番偉いかを争うなど、信仰の未熟さが目立ってしまうフェーズでもあります。

第4フェーズの「残念な感じ」

第4フェーズ（9:1-9:50）では、弟子たちが大きな一歩を踏み出す一方で、彼らの理解の限界が強調され、「残念な感じ」が漂っています。特に、イエスが自分の死と復活を予告しても、それが「ピンと来ない」様子が繰り返し描かれています。例えば：

- **9:45:** イエスが受難を予告したとき、弟子たちはその意味を理解できず、「その言葉がわからなかった」とあります。
- **9:33:** イエスの変貌の場面で、ペテロが的外れな提案（仮小屋を建てる）をし、イエスの栄光の意味を掴みきれないことが示されます。
- **9:46-48:** 弟子たちが「誰が一番偉いか」を議論する場面は、彼らがイエスの教えの本質（謙遜と奉仕）を見失っていることを露呈しています。

群衆がイエスを「預言者がよみがえった」と見るのに対し、弟子たちはもっと深い理解が求められているのに、それに届かない姿が浮かび上がります。この「残念な感じ」は、弟子たちがまだイエスの真の使命——特に「よみがえって生きること」を含む神の計画——を把握できていないことを示しています。

「残念な感じ」の意味と役割

しかし、この「残念な感じ」は、物語の中で重要な役割を果たしています：

- 1. 弟子たちの人間的な弱さ** 弟子たちはイエスの最も近い存在でありながら、彼の言葉や奇跡の深い意味を理解できないことがあります。これは彼らの人間的な未熟さをリアルに描き、読者に共感を呼び起こします。
- 2. 信仰の成長の過程** イエスの受難と復活がピンと来ないのは、弟子たちが信仰の旅の途上にいる証拠です。第4フェーズでは、彼らが権威を与えられて宣教する一方で、まだ完全な理解に至っていないことが強調され、信仰の成熟が段階的なものであることを示しています。
- 3. 後の成長への伏線** この未熟さは、後に弟子たちがイエスの死と復活を経験し、聖霊の降臨（使徒言行録）によって初めてその意味を悟る展開への布石です。ルカは弟子たちの「残念な感じ」を描くことで、イエスの復活の重要性を際立たせています。

結論

4つのフェーズを通じて、弟子たちの信仰は少しずつ成長していきますが、第4フェーズ（9:1-9:50）では、彼らがイエスの「よみがえって生きること」をピンと来ていない「残念な感じ」が際立っています。イエスが権威を与え、宣教に派遣したにもかかわらず、弟子たちは受難予告や神の計画の核心を理解できず、未熟さが露呈するのです。しかし、これは彼らがまだ成長の途上にいることを示すものであり、ルカ福音書全体の中で、彼らの信仰が後に成熟していく過程の一部として重要な意味を持っています。

ご指摘の通り、第4フェーズの「残念な感じ」は、弟子たちの信仰の現実とイエスの教えの深さを浮き彫りにする、物語の鍵となる要素ですね。

聖霊が与えられないと本物の信仰には至らないのですよね。十字架と復活を見ても疑う弟子たちでした。

はい、あなたの指摘の通り、聖霊が与えられないと本物の信仰に至るのは難しいという考え方は、キリスト教の信仰理解において重要な視点です。イエスの十字架と復活を目撃した弟子たちが疑いを持ったという事実も、新約聖書に明確に描かれており、聖霊の役割が信仰の確立に不可欠であることを示しています。以下で、その点を詳しく説明します。

1. 弟子たちの疑いと信仰の未熟さ

イエスの十字架と復活は、キリスト教信仰の中心的な出来事ですが、弟子たちはそれを目の当たりにしても、すぐにその意味を理解し、確固たる信仰を持てたわけではありませんでした。

- トマスの疑い（ヨハネ20:24-29）** 復活したイエスが弟子たちに現れたとき、トマスは「自分の目で見て、手で触れなければ信じない」と言い、疑いの姿勢を示しました。イエスが再び現れてその証拠を見せた後、トマスは「私の主、私の神よ」と告白しましたが、これは弟子たちの信仰が最初から完全ではなかったことを表しています。
- 恐れと混乱（ルカ24:36-43）** 復活したイエスが現れた際、他の弟子たちも「幽霊を見ている」と恐れ、疑いで心が乱れました。イエスは手足を見せ、魚を食べることで復活の現実を証明しましたが、彼らの反応は人間的な弱さと信仰の未熟さを映し出しています。

これらのエピソードから、十字架と復活という決定的な出来事を目撃しても、弟子たちはすぐには本物の信仰に至れなかったことがわかります。

2. 聖霊の役割と信仰の深化

新約聖書では、聖霊が与えられることで弟子たちの信仰が強まり、イエスの死と復活の真の意味を理解できるようになったとされています。

- **ペンテコステの出来事（使徒言行録2章）** イエスの復活と昇天後、弟子たちはペンテコステの日に聖霊を受けました。このとき、彼らは大胆に福音を宣べ伝え、数千人が信仰を持つに至りました。それまで恐れや疑いの中にあった弟子たちが、聖霊の力によって変貌し、宣教に励むようになったのです。
- **イエスの約束（ヨハネ14:16-17、16:13）** イエスは弟子たちに、聖霊が「真理の霊」として来ると約束しました。聖霊は彼らを導き、イエスの教えや神の計画を理解させ、信仰を深める助け手となる存在です。これがなければ、弟子たちは出来事の表面的な理解にとどまり、本物の信仰に至ることは難しかったでしょう。

3. 聖霊がなければ本物の信仰に至らない理由

弟子たちの物語からわかるように、聖霊が与えられる前は、彼らの信仰は不完全で、疑いや恐れに支配されていました。聖霊が降臨した後、彼らは初めてイエスの十字架と復活が神の救いの計画の一部であることを悟り、勇敢にそのメッセージを伝える者へと変えられました。

- **人間の限界:** 人間の力だけで神の業を完全に理解し、信仰を持つことは難しいです。弟子たちの疑いはその限界を示しており、聖霊の働きがそれを乗り越える鍵となります。
- **信仰の内面的変革:** 聖霊は単に知識を与えるだけでなく、心の内側から信者を変革し、本物の信仰へと導きます。ペテロがペンテコステで力強く説教できたのも、聖霊によるこの変革があったからです。

結論

おっしゃる通り、聖霊が与えられないと本物の信仰に至るのは困難です。十字架と復活を目撃した弟子たちが疑ったのも、聖霊の力を受けていない段階では、その出来事の深い意味を理解しきれなかったためです。聖霊が降臨することで、彼らの信仰は確固たるものとなり、イエスの使命を果たす力が与えられました。キリスト教において、聖霊は信仰を完成させる不可欠な存在なのです。

第4フェーズの「残念な感じ」によって、かえって、十字架と復活、そして聖霊降臨という「永遠のいのち」の必要性が明らかにされているのかもしれない

その通りですね。ルカ福音書9:1-9:50の第4フェーズにおける弟子たちの「残念な感じ」は、かえって十字架、復活、そして聖霊降臨という「永遠のいのち」の必要性を明らかにする重要な役割を果たしています。このフェーズでは、弟子たちの未熟さや理解の限界が目立ちますが、それが神の救いの計画の深さと聖霊の力の必要性を際立たせるための布石となっているのです。以下で、その仕組みを詳しく見ていきましょう。

1. 弟子たちの「残念な感じ」とは何か

第4フェーズでは、弟子たちはイエスから権威を与えられ、宣教に派遣されて奇跡を起こす力を経験します（ルカ9:1-6）。しかし、イエスが受難予告（死と復活の予言）を語ってもそれを理解できず（ルカ9:44-45）、さらには「誰が一番偉いか」を争うなど（ルカ9:46-48）、信仰の未熟さが露呈します。この「残念な感じ」は、人間的な努力や知識だけでは神の計画の本質を掴むことが難しいという現実を示しています。

2. 十字架と復活の必要性が浮き彫りに

弟子たちがイエスの受難予告を理解できなかったことは、十字架と復活が単なる出来事ではなく、人類の罪を贖い、「永遠のいのち」をもたらす神の計画の核心であることを強調します。彼らの理解の限界は、イエスの犠牲と勝利がなければ、真の救いも信仰の完成もあり得ないという事実を際立たせています。弟子たちの「残念な感じ」は、十字架と復活が不可欠である理由を逆説的に明らかにしているのです。

3. 聖霊降臨の重要性

このフェーズの「残念な感じ」は、聖霊降臨の必要性を強く示しています。弟子たちはイエスの教えや奇跡を目の当たりにしても、その真の意味を把握できず、信仰が揺らいでいました。しかし、後に聖霊が降臨したとき（使徒言行録2章）、彼らは内側から変革され、イエスの死と復活の意義を悟り、福音を大胆に宣べ伝える者へと変わりました。この対比から、聖霊の力がなければ本物の信仰や「永遠のいのち」への道は開かれないことが明らかになります。

4. 「永遠のいのち」への道

弟子たちの未熟さは、人間が自力で「永遠のいのち」を得られないことを示しています。イエスの十字架と復活は罪の赦しと永遠のいのちをもたらす神の恵みであり、聖霊はその恵みを理解し、信仰を深めるための導き手です。第4フェーズの「残念な感じ」は、これらの要素が欠けていれば神の国に入ることができないという現実を浮き彫りにし、救いの計画における聖霊の役割を強調しています。

結論

ルカ福音書9:1-9:50の第4フェーズにおける弟子たちの「残念な感じ」は、十字架、復活、そして聖霊降臨の重要性を際立たせるための神学的な仕掛けとして働いています。弟子たちの限界が、聖霊の力による信仰の変革と「永遠のいのち」の必要性を明らかにし、神の救いの計画の深さを私たちに教えてくれるのですね。

ほかの3つの福音書と五千人給食の箇所をくらべてみても、弟子たちの未熟さが表れています。まるで荒野でマナを与えられたのに信じなかった民のように。

ルカ福音書の五千人給食の箇所（ルカ9:10-17）を、他の3つの福音書（マタイ、マルコ、ヨハネ）と比較すると、弟子たちの未熟さが特に強調されており、彼らがイエスの力を信じきれず、無力感に囚われる様子が描かれています。これは、まるで荒野でマナを与えられたにもかかわらず神を信じなかったイスラエルの民の姿を彷彿とさせます。以下で、各福音書の記述を比較しながら、その点を詳しく見ていきましょう。

各福音書における五千人給食の記述

マタイ福音書 (マタイ14:13-21)

- **状況:** イエスが群衆を哀れみ、病人を癒やした後、夕方になると弟子たちは「ここは寂しい所で、時間も遅くなりました。群衆を解散させてください」と提案します。
- **イエスの反応:** 「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と命じます。
- **弟子たちの対応:** 「五つのパンと二匹の魚しかありません」と答えます。
- **特徴:** 弟子たちは自分たちの手元にあるわずかな物資に目を向け、解決策を見いだせませんでした。

マルコ福音書 (マルコ6:30-44)

- **状況:** 弟子たちが宣教から戻り、イエスは彼らを静かな場所に連れて行こうとしますが、群衆が追いかけてきます。イエスは群衆を教え、弟子たちは「群衆を解散させてください」と提案します。
- **イエスの反応:** 「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と答えます。
- **弟子たちの対応:** 「二百デナリのパンを買って与えるのですか」と尋ねます。
- **特徴:** 弟子たちは現実的なコスト (二百デナリ) を挙げて、自分たちでは不可能だと考えました。

ヨハネ福音書 (ヨハネ6:1-15)

- **状況:** イエスが弟子たちを試すために「どこからパンを買って、この人々に食べさせようか」と尋ねます。
- **弟子たちの対応:** ピリポは「二百デナリのパンでも足りない」と答え、アンデレは「ここに大麦のパン五つと魚二匹を持っている少年がいますが、それが何になりますか」と提案します。
- **特徴:** 弟子たちは具体的な提案を出すものの、それが不十分であることを自覚し、イエスの意図を理解できませんでした。

ルカ福音書 (ルカ9:10-17)

- **状況:** 弟子たちが宣教から戻り、イエスは彼らをベツサイダに連れて行きますが、群衆が追いかけてきます。イエスは神の国を語り、病人を癒やした後、弟子たちは「群衆を解散させてください」と提案します。
- **イエスの反応:** 「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と答えます。
- **弟子たちの対応:** 「私たちには五つのパンと二匹の魚しかありません」と応じます。
- **特徴:** 弟子たちは直前に宣教で奇跡を経験しているにもかかわらず、イエスの力を信じられず、自分たちの無力さに焦点を当てています。

弟子たちの未熟さの比較

4つの福音書すべてにおいて、弟子たちは群衆に食べ物を与えるという課題に対して無力感を示し、イエスの力を十分に信じていない様子が描かれています。しかし、ルカ福音書ではその未熟さが特に際立っています。

- **共通点:** 各福音書で弟子たちは「群衆を解散させる」という消極的な解決策を提案し、イエスから「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と言われると、自分たちの限られた資源や現実的な制約を理由に躊躇します。

- **ルカの特徴:** ルカでは、弟子たちが直前に宣教に出て、イエスの名によって悪霊を追い出し、病気を癒やす奇跡を経験している（ルカ9:1-6）にもかかわらず、再び無力感を示します。この一貫性のなさが、彼らの信仰の浅さを強調しています。

例えば、マルコやヨハネでは弟子たちが具体的な質問や提案（「二百デナリでは足りない」「少年のパンと魚があるが不十分」）を出す一方、ルカでは単に「五つのパンと二匹の魚しかありません」と述べるだけで、解決策を模索する姿勢すら見られません。これは、彼らがイエスの力を目の当たりにしているはずなのに、それを状況に適用できていないことを示します。

荒野のマナとの類似性

この弟子たちの態度は、出エジプト記で荒野を旅するイスラエルの民の姿と重なります。民は神からマナを与えられ、奇跡的に養われたにもかかわらず、すぐに不平を言い、神の力を疑いました（出エジプト16章）。同様に、弟子たちもイエスの奇跡を何度も見ながら、群衆を養うという場面で信仰が揺らぎ、自分たちの無力さに囚われてしまいます。

特にルカ福音書では、宣教の成功を経験した直後であるにもかかわらず、弟子たちが同じ過ちを繰り返す様子が強調されており、彼らの未熟さがより鮮明に描かれています。これは、まるでマナを与えられた民が神を信じきれなかったように、弟子たちがイエスの真の力と神の計画に対する理解が不足していることを示唆しています。

結論

ルカ福音書の五千人給食の箇所を他の3つの福音書と比較すると、弟子たちの未熟さが特に強調されています。彼らはイエスの力を目の当たりにしているはずなのに、群衆に食べ物を与えるという課題に対して自信を持たず、無力感に焦点を当てる姿が描かれています。この態度は、荒野でマナを与えられたにもかかわらず神を信じなかったイスラエルの民と類似しており、弟子たちの信仰がまだ成長途上にあることを表しています。

ヨハネでは、つづく「いのちのパン」の講話があり、最後は不信仰で人々が離れていきます

ヨハネ福音書では、「五千人の給食の奇跡」の後に「いのちのパン」の講話が続き、最終的に人々の不信仰によって多くの弟子がイエスから離れていく様子が描かれています。この一連の出来事は、イエスの教えの深さと信仰の試練を強調する重要な場面です。以下にその概要を説明します。

1. 「五千人の給食の奇跡」から講話へ

ヨハネ福音書6章において、イエスは五つのパンと二匹の魚を用いて五千人を養う奇跡を行います（ヨハネ6:1-15）。この驚くべき業に感銘を受けた群衆はイエスを王にしようとしませんが、イエスはその期待を避けて山に退きます。その後、イエスは湖上を歩く奇跡を見せた後（6:16-21）、群衆に対して「いのちのパン」の講話を始めます（6:22-59）。

2. 「いのちのパン」の講話の内容

この講話で、イエスは自らを「天から下った生けるパン」と呼び、こう宣言します：

- 「わたしはいのちのパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」 (6:35)。
- 「わたしを食べる者は永遠に生きる」 (6:51)。

イエスは、物質的なパンではなく、信仰によって永遠の命を与える霊的な救い主であることを強調します。ここでの「食べる」という表現は、イエスとの深い信仰の結びつきを象徴しており、後の十字架と復活を指し示すものと考えられます。

3. 人々の不信仰と離反

この教えは多くの人にとって理解しがたく、衝撃的なものでした。弟子たちの間からも「これはひどい言葉だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」という不平が起こります (6:60)。その結果、「多くの弟子が離れ去り、もはやイエスと共に歩かなかった」と記されています (6:66)。彼らは奇跡には惹かれたものの、イエスの霊的な使命を受け入れる信仰を持てなかったのです。

4. 真の信仰の顕れ

イエスは残った12弟子に「あなたがたも離れたいか」と尋ねます (6:67)。すると、ペテロが代表してこう答えました：

- 「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。わたしたちは、あなたが神の聖者であると信じて知っています」 (6:68-69)。

この告白は、不信仰で離れていく者たちとは対照的に、真の信仰が試練の中で揺るがないことを示しています。

結論

ヨハネ福音書の「いのちのパン」の講話は、イエスの教えが物質的な奇跡を超えた霊的な救いを示すものであり、それが人々の不信仰を露わにし、多くの弟子の離反を引き起こしました。この出来事は、イエスが単なる王や預言者ではなく、永遠の命を与える神の御子であることを明らかにし、真の信仰を持つ者とそうでない者を分ける転換点となっています。

弟子たちは離れません。その信仰は、ヨハネでは、最後の大祭司としての祈りの中で主が執りなしてください

はい、おっしゃる通りです。ヨハネ福音書において、弟子たちがイエスから離れなかった信仰は、イエスが最後の「大祭司としての祈り」の中で執りなしてくださったことによって支えられ、強化されています。以下でその点を詳しく説明します。

弟子たちの信仰：イエスに留まる決断

ヨハネ福音書では、弟子たちの信仰が試練に直面しながらも、イエスに留まる姿が描かれています。例えば、ヨハネ6:66-69では、多くの人々がイエスの教えを理解できずに離れていく中、12弟子はイエスを見捨てませんでした。ペテロが「主よ、あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。わたしたちは、あなたが神の聖者であると信じて知っています」と告白したことは、彼らの信仰の強さを象徴しています。この決断は、弟子たちが単に奇跡を求める群衆ではなく、イエスの言葉と本質を信じる真の弟子であることを示して

います。

しかし、弟子たちの信仰には弱さも見られます。**ヨハネ13:36-38**では、ペテロが「命も捨てます」と誓うものの、イエスから三度の否認を予告される場面があります。これは、彼らの信仰がまだ未熟で、人間的な限界を持っていたことを表しています。

イエスの執り成し：大祭司の祈り

弟子たちの信仰が試練の中で保たれ、成長していく鍵は、イエスの執り成し、特に**ヨハネ17章**に記された「大祭司の祈り」にあります。この祈りは、イエスが十字架にかかる前に弟子たちのために神に訴えたもので、彼らの信仰が守られるための特別な執り成しです。

- **ヨハネ17:6-8**: イエスは、弟子たちが神から与えられた者であり、イエスの言葉を受け入れ、彼が神から来たことを信じたことを認めています。
- **ヨハネ17:11-12**: イエスは、自分が世を去った後も弟子たちが「一つ」となり、神の名によって守られるよう祈ります。ユダを除き、弟子たちが失われなかったことも強調されています。
- **ヨハネ17:15-19**: イエスは、弟子たちが世の悪から守られ、真理によって聖別されるよう願います。彼らが神の使命を果たすために世に遣わされることも祈りの一部です。

この大祭司の祈りは、弟子たちの信仰が彼ら自身の力だけに頼るものではなく、イエスの執り成しと神の守りによって支えられていることを明確に示しています。イエスは彼らが試練に耐え、真の信仰を保つことができるよう、執り成してくださいました。

信仰の完成：イエスの執り成しの効果

イエスの執り成しは、弟子たちの信仰が最終的に成長し、完成へと向かう基盤となりました。**ヨハネ20:19-23**では、復活したイエスが弟子たちに現れ、「平和があるように」と祝福し、聖霊を与えて使命を託します。この出来事は、イエスの祈りが成就し、弟子たちが信仰を強められ、神の働きを担う者へと変えられた瞬間です。また、**ヨハネ14:16-17**や**16:13**で約束された聖霊の導きにより、彼らはイエスの教えを完全に理解し、信仰を確固たるものにしました。

結論

ヨハネ福音書において、弟子たちがイエスから離れなかった信仰は、イエスの執り成し、特に最後の大祭司の祈りによって守られ、強化されました。この祈りの中で、イエスは弟子たちが神の真理に留まり、世の試練を乗り越え、永遠の命に至る信仰を持つよう執りなしてくださいました。弟子たちの信仰は、イエスの執り成しがあってこそ、試練を耐え抜き、成長していったのです。